

心の友

私どもはいつも多くの人と出会います。しかし、出会った人、全部と親しくなる事はできないのです。多くの人と出会いながら、心を通わせることなく過ぎていく、そして、また新しい出会いが続く。出会いはただの小さな光の点にすぎません。その光の点がやがて、自分の心に暖かな大きな灯となってもり続ける、それが心の友。「どうだ!」と眼鏡をかけた写真を送った。「どうだ!」と、禿げ頭の写真を送ってきた。こんな友がひとりでも、ふたりでもいたら人生は豊かなものになります。高校時代はそんな心の友が出来る時代。それは苦楽を共有したことから生まれます。特に寝食を共にすることは、人と人との繋がりを濃く深くするものです。その点で寮も大切な学校の柱。本校は今、¹³⁴人の寮生がいます。4人の舎監の先生と副校長先生がお世話しています。部活動への配慮も十分、保健管理、栄養管理、生活指導などすべてが万全。この寮生活から禿げ頭の写真を送る心の友がきつとできると信じています。

平成二十一年九月二十五日

国府はがき通信

No167

遠まわり

今朝もまた赤ちゃん誕生の報告です。4 kg近い男の子。子育てが終った先輩先生がいろいろアドバイスをしています。今からの日本、子どもが増えるかもわかりません。子ども手当の充実。中学卒業まで子どもひとりにも月額2万6千円の支給、公立高校の無償化、私立高校にはそれ相当の補助。明日はばら色に輝いて見えます。優秀な生徒はどんどんやって来る。補助金は増える。一見私立高校は隆盛を極めそうです。しかし私もそうは思っていません。地方の私立には厳しい時代がやって来るのではないのでしょうか。無償化の公立よりも、より魅力のある学校でなければ生徒は来ないのです。まさにこれから私立の真価が問われる時代。国府高校も今、私立だから出来る教育に必死に取り組んでいます。遠まわりでも良い。繰り返し繰り返し教える生活指導、進路指導。9月26日(土)体験入学にぜひおいで下さい。そしてご覧下さい。ひとりひとりを大切にする教育現場を。私どもは信じています。さくら咲き、心足る日の遠まわり。

平成二十一年九月十八日

国府はがき通信

No166

縄飛び

「半円の縄が天を小さく切ったとき、もう君は足許のそれを飛び、半円の輪が君の頭上を越えるとき、君はまた、それを越える。」こうして人は人生のハードルを越えていきます。「子育てにマニュアルなし」という本を書かれた吉野由美さんもそうです。吉野さんは二十六年前、本校を卒業、バスガイド、水泳のインストラクター、アイスクリーム屋など、ありとあらゆる仕事をされました。その愛と本気の子育ての日々を読むと、この本がベストセラーになるのも、うなずかれます。「やるべきありやるんです」吉原誠君も叫びます。NHK杯サッカー選手権、学園大が初の天皇杯獲得、その試合でハットトリックを達成したのです。九州吹奏楽コンクール出場の県立大、川端歩さんも三十五名の仲間とともに、妙なる旋律を奏でていました。「先生、トンボが入ってきました。」一人の生徒が手を挙げます。朝早く、授業の始め。この子供達も秋風の中に、人生の縄飛びを始められています。

平成二十一年九月十一日

国府はがき通信

No165

手にした宝物

夏休みが終わりました。九月一日、登校して来る生徒諸君に問いかけます。「君には、成し遂げたと言い切れるものが、しつかりと残っていますか。」そんな時、三年生の学年通信に、こんな文章が載っていました。「初めての野球応援で手にした宝物。試合には全員が出場できるわけではありません。出れなくても、一生懸命頑張っている選手に、力強く大声を出して声援を送る部員の姿に熱い思いが伝わってきました。辛い練習も一緒に耐えてきた仲間だからこそだと思いました。結果は負けてしまい、その姿を見るのは本当に辛かったです。でも涙を流しながら、皆に“ありがとう”と言っていたのには感動しました。感動を与えてくれた野球部員に“ありがとう、お疲れ様”と言いたいです。高校野球最後の夏に、その場に一緒に居れたことに感謝します。」まだ伝統がない全校応援、とまどいの連続。しかし、生徒諸君の心に美しい豊かな宝が育っていました。さわやかな秋。その宝が涼やかにこの学園に満ち満ちることでしょう。

平成二十一年九月四日

国府はがき通信

No164

計れないもの

「君はこんなに色が白かったのか。」「そうです。本当は美男子だったのです。」美男子というより、じゃがいもに似ている三年生。先輩顔して応援に来ています。学校の秋は部活動からやって来ます。七月が終ると、もう秋。新人戦が始まります。校内では就職活動がフル回転。企業訪問、面接指導、論文指導。大学進学の課外も毎日です。九月二十六日(土)学校説明会の準備も万全。中学生に本校のすべてを知っていただきたい。先生方の熱い思いが伝わります。文科省の調査によりますと親の年収が上がると学力も比例して上昇すること。教育問題は結局経済問題なのでしょうか。本校は学力は勿論ですが、心を育てたい。夏の暑い日、下級生の試合を応援する三年生。盆休みに手土産を持ってやって来る卒業生。赤ちゃんを抱っこして先生方に見せに来る若いおかあさん。人には計れないものが沢山あるような気がするのです。

平成二十一年八月二十八日

国府はがき通信

No163

夏は若者の季節

夏は若者の季節。涼やかな川の音。降りそそぐ蝉の声。早朝からの空の青。ぎらぎら光る波頭。しかし、今年は違ってきます。激しく音をたてる濁流。降りそそぐ雨。早朝から重く厚い曇天。赤潮が光る波頭。発生する新型インフルエンザ。けれど若者の季節であることは同じです。たわわな実りの秋はじつとりとしたこの暑さの中で、どれだけ汗を流すかにかかっています。人生は何をしなくても、めいっばいしても同じスピードで一日が過ぎて行きます。同じなら命ある限り汗を流したい。スポーツも勉強も同じ汗。当たり前前のことを、実現するまでは思い続けること。ひたすら行動すること。学校はどんな時でも生徒がいます。活動しています。夏が一番活気があるのです。生き生きしているのです。国府高校には、これに卒業生がやって来ます。都会の風をそのまま包み込んでやって来ます。まだたわわに実っているとは思えないけど、青い実を確かにつけています。夏はやはり若者の季節。

平成二十一年八月二十一日

国府はがき通信

No162

命

黒く厚い雲が流れる。肌にとまといつく湿気。生暖かい風が吹く。やがて雨、激しい雨。道は川となり校庭は湖水、翌朝は快晴。痛い夏の太陽。緑が濃くした雑草が天に伸びる。大地に根を広げ、一日で周りを覆いつくす。夏。

天地の熱い息吹の中で卒業生の訃報を聞く。二十一才、卒業四年目。結婚して可愛い男の子を産んでの急死。葬儀には級友のほとんどが参列。やんちゃだった者、先生をいつも困らせていた者、真面目だった者。みんな涙を流した。まとまりのないようであったが、ひとりひとりの力が合わさって、クラスというものが出来ていたのだ。高校時代という三年間たまたま出会って、お互いの人生を共にしてきた人。そんな人がいなくなって、初めて気づく大切なもの。ひとりの級友を失って知る自分の命。それはみんなの命。蝉時雨の中、虚ろな時間、仲間たちは黙って柩を見送った。《幼な児を残して夏に友は逝く》

平成二十一年八月十二日

国府はがき通信

No161

夏という名の宝物

夏という名の宝物は、泥と、汗と、涙と、仲間たち。みんな泣いた。声をあげて泣いた。野球部準決勝敗退。「泣くな、胸を張れ、君たちは野球部の歴史を刻んだのだ。ベスト4はみんなで作った歴史なのだ。最高の夏だった。この敗戦から学べ。」そう言いながら私も涙が出そうになる。三年間、毎日、自転車でグラウンドに駆けつけ、レギュラーの座を掴めなかった者。二年生の時に、フランスの学校から本校を選んで転校、たった一度、練習試合に出て三振。「いい思い出が出来ました。」と爽やかに笑った者。みんな泣いた。涙が止まったらキャプテンを胴上げて雄叫び。大きな息子と小さな母親と記念写真。みんなみんな宝物。対戦した学校からも宝物、それは全体でつくり出す団結力。野球に取り組む、「魂」この宝物を無駄にはしない。最後の最後に勝負を分ける魂、勇気を持って踏み込んでいく魂、命懸けて野球に取り組む魂。また新たな挑戦は始まる。

平成二十一年八月七日

国府はがき通信

No160

仕事の出発点

朝から拍手が鳴り響きます。お子様誕生の報告です。父親になつたばかりの若い先生が歯切れの良い挨拶をします。さらに拍手、歓声。学年部会では「お子様の名前の由来は……」などと次から次へと質問が飛び出ます。それにひとつひとつ真面目に応える若い先生。お祝いの贈呈式まであつていきます。人生には多くの出来事があります。しかし記憶として刻み込まれるのは、ほんのひと握りの出来事です。同じ出来事でもそれを皆で強く印象づけていく、そんな仲間がいれば記憶はどんどん増えていきます。大切なのは記憶の原石を磨き上げ、燦々と光を放つものに仕上げる人がいる事です。「何か祝う事はないか。あの人に光を当てる場所はないか」本校にはいつも誰かが目を光らせています。主役に引き上げ、光を当てる人がいるのです。今日のこの朝、若い先生は主役になり、光が当たり、記憶の原石が磨き上げられました。あなたが思うこと、それが仕事の出発点。

平成二十一年七月三十一日

国府はがき通信

No159

額に汗をにじませてダンボールの箱をたたんでいる先生、「朝から大変ですね」「いや生徒から言われたのです。それリサイクル出来るのではないですか」と、ちよつとした事だけど、とても大切な事が含まれているような気がします。先生に何でも言える生徒。なるほどと思ってダンボールの厚紙をまとめる先生、「このような雰囲気新しい学校づくりに役立つていくのだから」と思います。私も高校時代、「民主主義は嫌いだ」と言つて違反したズボンをはサミでジョキジョキ切つてしまふ先生がいました。今はもうそんな事は出来ません。生徒たちの心を開かせる学校が求められています。しかしこれは生徒を放任する事ではないのです。先日、感動したテレビがありました。ある中学校で、自分のクラスに威圧をかけた来た上級生を、激しく命を懸けて叱っている先生が映し出されました。生きた学校づくりは、生きた先生がいて、はじめて出来る事なのだと思つづく感じだったのでした。本校の先生も叱る時は叱る先生なのです。

平成二十一年七月二十四日

国府はがき通信

No158

ここはどこな

雨が降っていました。バスは満員です。運転手さんの後ろの席におばあさんが座っています。おばあさんは叫びます。「ここはどこな」運転手さんは丁寧に応えます。「ここは国府です。おばあちゃんが降りる市役所前に来たら、ちゃんと教えるから安心してね。」それでも、おばあちゃんは叫びます。「ここはどこな」雨が激しくなりました。運転手さんはもう応えません。おばあちゃんは傘の先で運転手さんの背中をドンと突いて叫びます。「ここはどこな」運転手さんはゆっくりと応えます。「ここは背中です」車内は笑い声があふれます。今、中学生の前に「高校」というバスがやってきます。中学3年生はそのバスを選ぶ時期です。どのバスに乗ってもいいのです。結局、その車内で何が起こり、どんな仲間が出来るか、それが一番問題なのです。学び、笑い、涙し、語る。それが高校です。7月18日(土)9時、本校で一日体験入学が実施されます。「熊本国府高校」というバスに、ちょっと乗ってみませんか。

平成二十一年七月十五日

国府はがき通信

No157

蓮の音

蓮の花が咲く時の音を聞いた事がありますか。かすかに、かすかに音がするので。爽涼な夏の朝、紅色の蕾がボンと音をたてて、ゆっくり開いていきます。すつきりと茎を伸ばし、高貴で凛とした花。今年も大賀はすが咲き出しました。二千年前のいにしえ人もこの花の音を聞いたのでしょうか。この蓮の実が発見された所は落合遺跡。丸木舟三隻とオール六本とともに発掘されました。たった三粒、その一粒が発芽したのです。ここは当時、縄文時代の舟だまりだったと思われる。夜明けとともに舟を出すいにしえ人。縄文時代、すでに人々は舟を操って海を渡り、遠方との交流や交易を盛んに行なっていたのです。南西諸島に生息するイモガイ製のペンダントが北海道の礼文島で出土されています。そんないにしえ人を見守り続けていた花、大賀はす。今年も国府高校で咲いています。どうか、そつとそつとおいでください。そのかそけき音を聞いてください。

平成二十一年七月十日

国府はがき通信

No156

濃密な時間

夜の雨があがって、きらめく新緑の中を女子中学生がやって来ます。色とりどりの鮮やかなユニフォーム。「第21回中学校招待女子ソフトボール研修会」。本校の野球場、サッカー場が会場です。参加校18チーム。早朝五時半には、高校総体で優勝した本校女子ソフトボール部員も駆けつけています。彼女たちもまた準備をしながら自分の中学時代を思い出し、いくつかの宝物を胸によみがえらせています。人生には数秒の出来事が、何度も思い出される瞬間があります。生き生きと生きる濃密な時間。それが今日、多くの中学生に訪れて欲しいと願いながら、ラインを引いています。過ぎ行く時間は忘れるためのものではありません。守り続けるものもあります。追い求め探し求め、やっと手に入れたものもあります。風の中で、また風のように飛び散ったものの中で、重く静かに輝いて残っているもの、今日がその日になって欲しいのです。九時、試合開始です。歓声がグラウンドに響きます。

平成二十一年七月三日

国府はがき通信

No155

一生懸命

朝七時、事務室の女の先生に深々と頭を下げている先生がいる。

「彼が何か失敗でもしたのですか。」と聞いたら「今日は私の誕生日なのです。おめでとーと言われたのです。」薫風が通り過ぎる心地良さ。校庭では女子生徒と先生が花を植えている。サッカー部顧問の若い先生が竹ぼうきで落ち葉を集めている。朝課外のために登校してくる生徒。「特別に心ときめく青春があったのでもない。青年らしい苦悩の日々に耐えたといえるのでもない。だけど、一生懸命だったよね……って思ったなら、涙が止まらなくなった。」熊曰「生きる」という欄で見つけた言葉。「収穫祭」でCDデビューを果たした、よしえ、本名岩田芳枝さん（平成九年卒）熊本県小中高ゴルフ大会、第三位入賞、重永礼音君（清水中）。本校にはいろいろな分野で活躍している生徒がいる。どれだけ生徒に一生懸命になれる場所を用意することが出来るか。それが大切なんだと、そう思いながら今朝も思い切り窓を開けて初夏の風を入れる。

平成二十一年六月二十六日

国府はがき通信

No154

みんなちがって、みんないい

学校はみんなちがう人が集まって、それぞれがしっかりと毎日を過ごす所だと思うのです。興味と意欲さえあれば、学びのすべてが将来を応援してくれます。しかし、同じように汗を流し、努力しても、同じように日が当たるとは限りません。敗者になることもあります。たとえ敗者になっても、その記憶まで敗れ去りはしないのです。記憶が糧となり、いつか実を結ぶこともあるはずです。部活でもそうです。予選の一回戦からマスコミが取り上げるものもあります。優勝しても小さな字で書かれるものもあります。大切なのは、夢の扉を開ける努力です。目立たないけれど、その夢の扉を開けて全国大会に出場する人がいます。「全国高等学校珠算電卓競技大会」溝口晃穂、普通科三年（東町中出身）、中西真理、商業科三年（託麻中出身）。人が何かに全精力を傾けて入れあげた時、かならず実るものがあります。懸命に打ち込んだことは、みんなちがって、みんないいのです。

平成二十一年六月十九日

国府はがき通信

No153

人が見える

「顔はよかけん、プレーは誉めて」。スポーツシャツの背中にこんな言葉を書いて、走っている若者がいます。顔を見て納得。いささか自由な髪をなびかせて、応援している女生徒がいます。何を見に来ているのか心配です。しかし、必死に応援しています。昼になると弁当を広げます。手作り弁当です。「君達が作ったの」「そうなの、食べてみる？」たまご焼きを一つ差し出します。おいしいのです。人は格好だけで判断したらいけないと、つくづく思います。はなやかな日の当たる場所に立つ者、男泣きして帰る者、裏方に徹して汗を流している者。高校総体、高校総文、本校は女子ソフトの優勝を頂点に多くの生徒が参加しました。「いいか、あの上から見下ろすと、俺がカラスぐらいに見えるだろう。物が小さく見えたり引き立って見えたりするのは、それはその人が置かれた立場次第なのだ。」シリベリン。生徒のそばに座っていると、今までは気が付かない所が見えてくるのです。

平成二十一年六月十二日

国府はがき通信

No152

「おはようございます。応援ありがとうございますとございました。お蔭で、心ひとつにして優勝することができました。」元気の良い張りのある声が響きます。六月一日、朝の職員室。ショートカットの髪、栗色の手、つぶらな瞳、女子ソフトボール部の生徒達です。

国府、六年ぶり覇権、古豪復活、攻守に一丸、熊日朝刊のコピーが机上を飾ります。「一人ひとりが一球、一球に集中している。大きな声で仲間を励まし合いながら、相手を圧倒している。」「一点を全員で守り、チームがひとつになって勝ち取った勝利」「ショートが三遊間のボールを身を投げ出して取ったプレー。ファーストのバントフライを飛び込んで取ったプレー。勝ちたいという気持が伝わって鳥肌が立った。勝って泣けるプレー、野球部が学ぶことはこれだ。」応援に行った野球部員の言葉。六月二日、若者のやさしいさざめきで満ち満ちていた高校総体、高校総文は終わりました。またひとつ、時は移って行きます。

平成二十一年六月五日

国府はがき通信

No151

未来に放つ眼光

「目標を決めて一歩ずつ積み重ねていった事が勝利をつかむ。心に願うこと、それが全ての始まり。さあやろうと決める、それが最初の一步。」平成二十一年五月二十二日、アスリートコース講話、「先輩アスリートに学ぶ」講師、勝田祥子さん（オムロンハンドボール部GK）平成九年卒業。

常にはるかなる目標をたてて、そこに努力を続けている先輩アスリート。日本一になった時の映像を見ながら後輩たちは目を輝かす。もうこの中から野球で三番バッターの座を確保しようとする者もいる。実力という名の燃料タンクを満たすのは、日々のたゆまざる鍛錬だということを、勝田先輩は教えてくれる。そして大舞台上で一滴残らず燃焼させる着火剤は、「負けてなるか」の気魄。

全日本のユニフォームを手に取り、メダルをさわって、アスリートコースの生徒達はメラメラと燃える眼光を未来に放つ。

平成二十一年五月二十九日

国府はがき通信

No150

そのバットを振り切れ
 その腕を振り切れ
 甘い誘惑を振り切れ
 すべてを振り切った
 その先に
 勝利はある
 そのために
 野球の
 魂をたたき込め

目は鋭くホームベースを見据え、右手を上げ、左手はまさにタッチしようとしている下山竜範君。遠くで目を細めて立っている永園監督、五月十二日、熊日朝刊の写真。「RKK旗争奪選抜高校野球国府創部4年目初V」大きな見出しが躍る。「地道に努力した選手の一打、本当にうれしい」監督の言葉が胸を打つ。名門、熊工に逆転勝ちしたことよりも、こつこつと努力した人に日が当たったことが嬉しい。すべてを振り切り、魂をたたき込んで、熊本国府高校野球部は真っ直ぐに青春街道を驀進する。

平成二十一年五月二十二日

国府はがき通信

No149

初夏

「先輩、こんにちは」センプイというところに力を入れて、部員が挨拶します。照れ臭そうにして、若者が来ます。卒業生です。今春、社会人になったばかりの若者です。手にはおみやげまで提げています。流行の髪型、流行の服装、中にはおへそまで見える服を着ている人もいます。わざわざお金をかけて、あんな破れかけた服を着なくてもよさそうなのに、と違ってしまいます。けれど、それが楽しいのです。「先輩、かわいい」なんて言われて、ニコニコ顔です。大型連休、本校は活気づきます。休みどころではありません。高校総体、高校総文、高校野球、各種の資格試験、きれいなきれいな青空、すぐに連休も終わります。「頑張ってください」さわやかな笑顔と声を残して卒業生が帰ります。若葉をなでて初夏の風。学校の鯉のぼりも元気に泳いでいます。宇宙の時間のひとときに、私どもがいて、高校生がいるのです。

平成二十一年五月十五日

国府はがき通信

No148

『年老いた私が、ある日、今までの私と違っていたとしても、どうかそのままの、私のことを理解して欲しい。あなたへの人生の始まりに、私がしっかりとして付き添ったように、私の人生の終わりに、少しでもだけ付き添って欲しい。あなたが生まれてくれたことで、私が受けた多くの喜びと、あなたに対する変わらぬ愛を持って、笑顔で答えたい。私の子供たちへ、愛する子供たちへ』

今、ポルトガル語で書かれた「手紙」というこの詩が静かなブームです。日本でも熊本県出身のシンガーソングライター樋口了一さんがこの詩に曲をつけて、切々と歌っています。もうすぐ母の日、高校生が両親がいなくては何も出来なかった頃を思い出して、人が年を取ることにへの思いを育んで欲しいものです。年を取るということは、今まで出来ていた事が、ひとつずつなくなっていくこと、そのなくなっていくことを、子供たちが優しい心でうめていく。それが人が人として、生きるということではないでしょうか。

平成二十一年五月八日

国府はがき通信

No147

この気もちはなんだろう

チィチィと鋭い小鳥の音がします。一羽が見張つて、もう一羽が小枝を屋根裏に運んでいます。水洗いしたような青い空。早朝の学校は命の流れで始まります。花壇に水やりをする先生、内科検診の準備に走り回る先生、校庭を掃除している女子バスケット部員、袋を下げて塵拾いに出かける陸上部員、素振りをしているソフトボール部員、教室で本を読んでいる女生徒。谷川俊太郎さんの詩が思わず口に出ます。「この気もちはなんだろう。目に見えないエネルギーの流れが、大地からあしのうらを伝わって、ぼくの腹へ胸へそうしてのどへ、声にならないさけびとなってこみあげる。この気もちはなんだろう。」

五月、なだれ落ちるような若葉みどりのなか、若者が走ります。若者が競います。五月六日、第38回RKK旗高校野球大会。五月十五日、本校体育大会。五月三十日、高校総文、高校総体、第55回NHK旗高校野球大会。この気もちはなんだろうと叫ぶ日々が続きます。

平成二十一年五月一日

国府はがき通信

No146

手紙

鈴木敏史

ゆうびんやさんが こない日でも

あなたに とどけられる

手紙はあるのです

ゆつくり 過ぎる 雲のかげ

庭にまいおるる たんぽぽのわた毛

おなかをすかした のらねこの声も

ごみ集めをしている人の

ひたいの汗も・・・

みんな 手紙なのです

読もうとさえすれば

平成二十一年四月二十四日

ノートもいらぬ。エンピツもいらぬ。手帳もいらぬ。携帯ひとつあればいい。そんな時代になりました。どんどん便利になって、それでいて、どんどん忙しくなっていく人々。何か大切なものをなくしていつているような気がします。四月二十二日から二十四日まで天草青年の家とあしきた青少年の家で一年生の宿泊研修があつています。海の風、小鳥のさえずり、野の花、友達とのかたらい。一年生は今、きつと美しい手紙をたくさん受取つてゐることでしょう。

自分の熊本城

対面式。真つ直ぐに前を向いて、新入生代表、菊池剣吾君（大津北中）が挨拶をする。「先生方、先輩方のご指導を仰ぎながら、自分達は自分の道を築いて参ります。」実に自信に満ちた、きちつとした言葉。ハーバード大のウィリアム・ジェームズという心理学者は「感情があつて行動があるのでない、行動にともなつて感情が現われる。」と述べている。すくつとした姿勢は菊池君の意気込みの強さを感じさせる。新入生はまず自分の夢や目標を心の中に描くべきだ。今は空中の楼閣にすぎないかもわからない。「空中に楼閣を築くことは無駄ではない。その下に土台さえ築けば本物の楼閣になる」W・トライン。その土台を築くのが高校時代。三年間という時をかけて、しつかりとした土台を築く。夜、桜の中に浮かび上がる熊本城。一つ一つの石を積み重ねて、城となり、天守閣となつている。一年生ひとりひとりの、自分の熊本城を築く土台づくりが、今日から始まつた。

平成二十一年四月十七日

国府はがき通信

No144

春かぜに花ひらく、かの人来るらし。春かぜに花ぞ散る、かの人去りゆくらし。花散らしの雨と風が吹き抜け、桜の季節も終ろうとしています。

水辺にひとひらのかたちを寄せあい、花びらが筏を作ります。春は出逢いと別れの季節。高校というひとつの山を登って、次の頂へと旅立った卒業生。「君よ、さらに登れ、あの山の頂よりも上に青い大きな弧を描く水平線があるのだ。」そう叫んで、ふと目をやると、もうつややかな若葉のような、はじける笑みをたたえて新入生が登ってきます。想うことがーグラム、進む気持ちがーグラム、祈ることがーグラム。喜ぶ気持ちがーグラム、見つめることがーグラム。もう、私のカッブは新しいあたたかな時間で一杯になるのです。

342名の新入生。新学科、新コースでスタートする一期生です。私どもは更なる挑戦を続けます。この一期生を先頭に次々と意欲ある生徒が続いて欲しいと、先生方の目も光輝いています。

平成二十一年四月十日

国府はがき通信

No143

石割桜

けふのうちに とほくへいつてしまふわたくしのいもつとよ。(永訣の朝
宮沢賢治) 金木は私の生れた町である。津軽平野のほぼ中央に位し(津軽 太
宰治) 盛岡の中学校のバルコンのてすりにもういちど我をよらしめ(石川啄木)
奥州花巻というひなびた町の浄土宗の古刹松庵寺で(智恵子抄 高村光太郎)
冬、北国のどんよりとした雲、そして降る雪、旅をする人の心も重く悲しい。
薄幸の詩人の跡を尋ね、北上川のほとりに佇み、詩人の慟哭を聞く。春、北国の
春は百花繚乱。その中でも見事なのが盛岡市の石割桜。樹齡35年のエドヒガン桜。
花崗岩の庭石を二つに分け、割れ目を押し広げ、枝いっぱいには花を咲かせる。幹
の周囲4.6m、樹高10.6m、枝の張り17m、昭和七年の火災の時、庭師 藤村治太郎
翁が身をもって守ったというエピソードがゆかしい。本校卒業式の理事長祝詞、
石割桜、卒業生が北国を訪ねる日も近い。

平成二十一年四月三日

国府はがき通信

No142